



### コンサートマスター

## 青山俊一さん

### インタビュー

11月6日に開催される、栄フィルの第66回定期演奏会で、コンサートマスターを務める青山俊一さんに、インタビューをしました。

～ヴァイオリンとはどのような付き合いをされてきたのでしょうか？～

学生時代、オケの仲間と弦楽アンサンブルを組み、バロックの楽しみに触れました。また APA (アマチュア演奏家協会) に入会し、活動に積極的に参加。家内(ピアノ&ヴァイオリン)とは APA の合宿(軽井沢)で知り合いました。当時、密かに始めたカルテットが病みつきとなり、定番曲は大半(ベートーヴェンは全曲)楽しみました。栄フィルには 30 数年前に入団し、現在に至っています。

娘は音楽家(ヴァイオリニスト)になり、自宅で合奏を楽しむことも多くなりました。

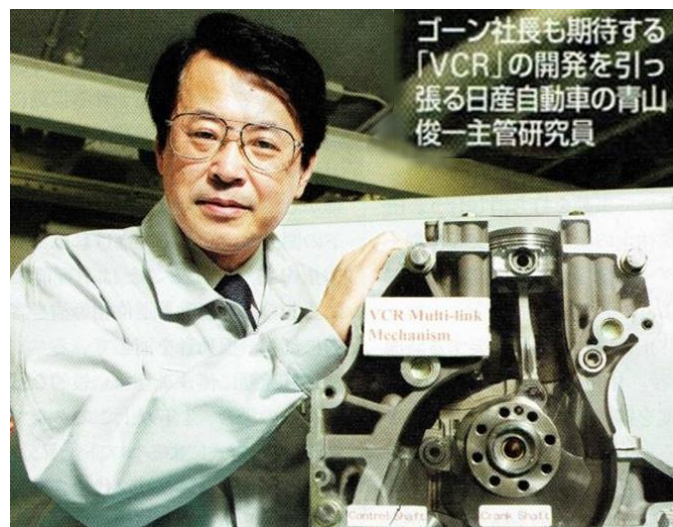


2つのヴァイオリンのための協奏曲

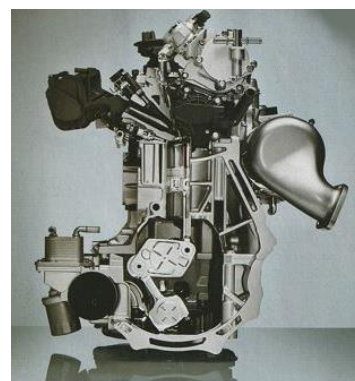
自宅での家族(家内、娘)との合奏(2020年)

～現役時代、日産にお勤めとききましたが、そのお仕事について教えてください～

日産自動車元 CEO のカルロス・ゴーン氏の事件は、記憶に新しいですが、20 数年前に日産に着任したばかりのゴーン氏に、私から大胆なエンジンの革新プロジェクトを提案し、巨額の予算を得ました。その成果が日産への置き土産となり、誕生した世界初の可変圧縮比エンジン(VCターボ)が、この夏に日本でも発売され、話題になっています(新型エクストレイル)。退職後は日産の社外アドバイザーとして、5～6年前まで技術発明のサポートを続けました。



日経ビジネス記事(最初のプロトタイプ)(2005年)



VCターボ(2019年北米で発売開始)

～ヴァイオリン以外の趣味はありますか？～

高校時代は芸大出の先生から指導を受け、美術部員として放課後、画家の仲間に加わりました。大学に入り、オケ活動が始まると、絵からは遠ざかり、数十年間中断していました。

しかし日産在職中、出張で立ち寄ったパリの大きな画材屋（セヌリエ）で、意を決してトランクー杯の画材を買い込み、数十年ぶりに油絵を再開し、現在に至っています。これまでに描いた絵の中から4枚を観て頂きたいと思います。



再開直後の画材の静物画（2006年）



夏空の下に広がるひまわり畑（2015年）



リーズ城（イギリス）の中庭にて（2010年）



娘夫婦のヴァイオリン（結婚祝いとして 2020年）



# ウェーバー

## 「オイリアンテ」序曲

パーカッション / 後藤和正

作曲者のカール・マリア・フォン・ウェーバーは、1786年にドイツ・オイティーン（北部バルト海沿岸のリューベック近郊）に生まれた。父は劇団を主宰していたが、9歳で本格的に音楽教育を受け才能を見せ、なんと11歳でオペラを作曲したとのことである。その環境でよくぞ音楽の才能を掘り出せたと感心するばかりである。筆者のように音楽と鉄道とにうつつを抜かしていた拳句、子供からズバ抜けた才能を引き出すような育て方をするでもなく、普通に日々楽しんで生きていることに幸せを感じているレベルとは大違いである。

話がそれだが、そんな才能に溢れたウェーバーであったが身体的には恵まれておらず、小児麻痺で片足が不自由だったり、18歳の時にワインと間違えて硝酸を飲んでしまい声が出なくなったりして、病弱がちであったそうである。18歳でワイン？というところには深く触れないでおきたい。

その後、作曲家・ピアニストとしてキャリアを積んだウェーバーは、ドイツオペラの代表作「魔弾の射手」を1821年に初演し、一躍人気者となった。それまでオペラといえばイタリアが主流だったところに、ドイツオペラという新ジャンルを築き、これを基盤にその後リヒャルト・ワーグナーが楽劇という高みに昇華させたことは、音楽史上でも極めて大きな功績と言えよう。そして、今回演奏する「オイリアンテ」や、英語によるオペラ「オベロン」などを書き上げたが、結核を患い1826年に39歳という若さでこの世を去ってしまう。これらのドイツオペラの成功から数年しか経っておらず、音楽にタラレバは禁句であるが、もっと長命であったら音楽史がどう変わっていただろうか。

ちなみに、ベートーヴェンはウェーバーの16歳年上で、ウェーバーが亡くなった1年後の1827年に56歳で亡くなっている。シューベルトはウェーバーの11歳年下で、ウェーバーが亡くなった2年後の

1828年に31歳で亡くなっている。今回の演奏会のプログラムは、奇しくも同年代の作曲家で、時まさに音楽が急進化している時代を象徴する楽曲ばかりであるので、それぞれの作曲者、楽曲のカラーを比べながら、お楽しみいただきたい。



前置きが長くなったが、楽曲の紹介をせねばなるまい。オペラ「オイリアンテ」(Euryanthe)は、中世フランスを舞台にした物語「ジェラルド・ド・ヌヴェールと徳高く貞節なウリアン・ド・サヴォワの物語」を元に、ヘルミーナ・フォン・シェジーが書いた台本にウェーバーが曲を付けたもので、1823年10月25日にウィーンのケルトナートーア劇場で初演された。

上演には3時間近くを要するが、現在では全編が上演・演奏されることは少なく、序曲が単独で取り上げられることが多い。というような感じで、オペラ全曲版が馴染みがない理由がその長さにあるような表現であるが、どうやら理由はそれだけではないようで、実は台本の出来がアレだという、いま話題の朝のアレに通ずる理由があるようである。しかしながら、音楽の素晴らしさは際立っており、その結果、序曲のみが抜き出されてしばしば演奏されている、というカラクリである。

ストーリーは、アドラール伯爵とその許婚オイリアンテが、女官エグランティーネやリジアルト伯爵によって次々降りかかる陰謀に翻弄され、大蛇が出てきて命を落としかねない危機に直面したり、姉の亡霊が出てきたり、何だかんだあったものの、終いには陰謀も晴れめでたく二人幸せになりましたとき、の合唱で締めくくるといようなものだそうである。(筆者によ

る省略と脚色が大いに含まれています。オペラは苦手なんですすみません。)



序曲は、変ホ長調の明るい曲調で始まり、ロマンス的な雰囲気、ささやくようなヴァイオリンの四重奏（アドラール伯爵の亡き姉エマの亡霊の雰囲気だそう）、陰謀がうず巻いているようなフーガを経て、再現部でハッピーエンド！という王道のソナタ型式の構成である。

オペラというとなかなか敷居が高いと感じられる方が多いと思いますが、この先が気になる方は録音や実演に触れてみてはいかがでしょうか。（かくいう筆者はこの敷居を未だ跨げずにおります。）

※挿絵は中世フランスのイメージです。

## ベートーヴェン

### 交響曲「第一番」

ヴァイオリン/野末麻美

ベートーヴェンは生涯に九つの交響曲を書きましたが、この作品は1799-1800 ベートーヴェン29歳の時の記念すべき第一作目で、ゴットフリート・ファン・スヴィーテン男爵に献呈されました。

ベートーヴェンの交響曲と言えば、第5番「運命」、第6番「田園」、第9番「合唱付」が特に有名です。第1番はそれらに比べると有名ではありませんが、17歳の時に憧れだったモーツァルトに会い、22歳の時に当時「交響曲の父」と呼ばれたハイドンを弟子入りし、その影響を受けつつも、ベー

トーヴェンの独自のアイデアが随所に見られ、詩を超えようという意気込みが感じられる、野望の詰まった作品になっています。1800年4月2日、ウィーンのブルク劇場で、自身の指揮により初演されました。全ての管楽器が二本ずつ揃っているというのがこの時代の交響曲ではあり得なかったので、「吹奏楽のようだ」と揶揄されました。



ベートーヴェンはこの頃には既に、ピアニスト、主にピアノ曲の作曲家として名は知られていました。しかし、28歳の時に耳が聴こえづらくなっている事に気づき、不安や恐怖を音楽にした、ピアノ・ソナタ第八番「悲愴」を作曲しています。症状は日に日に進行し、30歳の頃にはほとんど聴こえなくなっていたと言われていました。「交響曲第一番」は、この頃の作品です。32歳の時には自害も考え、遺書も遺していますが、「芸術を世に残さずこの世を去れない」と、演奏家を含めた音楽家から、作曲専門の音楽家に転身し、道を繋いでいきました。

#### 第一楽章 Adagio molt-Allegro con brio

八長調 4/4 拍子-2/2 拍子

序奏は主調の八長調ではなく、 $\wedge$ 長調の属七和音で始まります。この時代の交響曲は、主調を最初に示すのが通例であったため、この時代の人たちにとっては驚きのあるものでした。そして主題は、モーツァルト交響曲第41番「ジュピター」の主題と似ていると言われています。このように、モーツァルトのような大作曲家の影響を受けつつ、冒頭の意外性のある和音など、ベートーヴェンの斬新なアイデアが取り入れられています。

## 第二楽章 Andante cactabile con moto

ハ長調 3/8 拍子

主題は第二ヴァイオリンによって呈示されます。この主題も、モーツァルトの交響曲第40番の第2楽章の冒頭に似ていると言われています。この楽章では、ティンパニーが印象的に聞こえて来ます。第2楽章においてティンパニーを使われる事は珍しく、ベートーヴェンの新しい試みになっています。



習うのはやめにして、そのオーケストラに入団してみる事にしました。

このオーケストラはアマチュアオーケストラとしては少し変わった活動をしていて、通常アマチュアオーケストラは、私たち栄フィルの様に、演奏会に向けて数ヶ月決まった曲を練習します。しかしこのオーケストラは決まった曲を練習するのではなく、練習日には毎回違う交響曲を演奏していました。

座席も決まっていなく、今日は第一ヴァイオリンを弾いてみよう、とか、第二ヴァイオリンを弾いてみよう、という具合に、色々な作曲家の交響曲を、その日の気分第一ヴァイオリンや、第二ヴァイオリンで弾いてきました。

「アンサンブルそのものを楽しもう」という目的のオーケストラで、毎週末に演奏しに行くのがとても楽しみで、オーケストラというものの魅力に取り憑かれていきました。

ベートーヴェンやモーツァルトの交響曲はこのオーケストラでも人気で、今回の演奏会で演奏する、シューベルト交響曲第8番「グレート」と共に、よく演奏していました。

栄フィル第66回定期演奏会でこの2曲に決まったと聞いた時から、大阪時代を懐かしく思っていました。

## 第三楽章 Menuetto Allegro molto e vivace

ハ長調 3/4 拍子

楽譜にはメヌエットと書かれていますが、スケルツォに近い早さで、この時代の宮廷音楽のメヌエットとは様相が違います。この曲が作曲された頃には、ベートーヴェンは既に耳が聴こえにくくなって来ていた時期と言われていますが、それでも途中おどけたようなユーモアのあるメロディーもあり、テンポも早く、快活な楽章となっています。

## 第四楽章 Adagio-Allegro molto e vivace

ハ長調 2/4 拍子

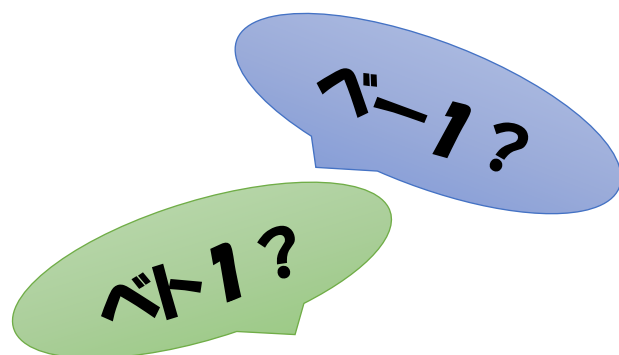
全合奏によるG音「ソ」の強奏ののち、第一ヴァイオリンの単奏で序奏が始まります。最終楽章で序奏がついているのは、当時珍しい事でした。序奏と言ってもとても単純で、「ソー」、「ソーラーシー」、「ソーラーシドー」、「ソーラシドレー」、「ソーラシドレミー」、「ソーラシドレミファー」というもので、ベートーヴェンの遊び心かも知れません。

「アダージョの序奏+ソナタ形式による主部」という構成で、最後は活気のあるコーダで曲が締めくくられます。

## ～ベートーヴェン交響曲第一番と私～

私がこの曲に初めて出会ったのは、大阪のアマチュアオーケストラに所属していた時です。子供の頃にヴァイオリンを習っていたのですが、習うのを辞めてからは、楽器ケースに触れる事すらしませんでした。

社会人になって落ち着いた頃、またヴァイオリンでも習ってみようかと思っていたところ、たまたまオーケストラ団員募集のチラシを目にしました。



私たち演奏者は、交響曲の名前を全部言うのととても長いので、例えば以前、栄フィル演奏会で演奏した「チャイコフスキー交響曲第5番」は「チャイ5」、「ブラームス交響曲第2番」は「ブラ2」と呼

ぶ事があります。今回も同じ様に、私は「ベー1、懐かしいな」と思っていました。ところが栄フィルで練習を重ねていくうちに、「ベー1」と呼ぶ人は誰もおらず、皆が「ベト1」と呼んでいる事に気付きました。どういう事か気になって、ネットで調べてみましたが、答えは見つかりませんでした。

そこで大阪の音楽仲間や、栄フィルの関東以外出身の方たちに、「ベートーヴェン交響曲第1番」を何と呼ぶか、聞いてみました。すると今まで知らなかったのですが、「ベートーヴェン交響曲第1番」を「ベー1」と呼ぶのは、関西だけの様でした。これは、例えば「マクドナルド」を関東では「マック」、関西では「マクド」と呼ぶ感覚に似ているのだと思います。こんな所にも、地域の違いがあって面白いなと思いました。

オーケストラの魅力は、「アンサンブル」「ハーモニー」なのだと思います。これは一人では出来ません。同じ「ベートーヴェン交響曲第1番」を演奏するにあたって、私が大阪で弾いていた「ベートーヴェン交響曲第1番」と栄フィルの「ベートーヴェン交響曲第1番」はまったく違う曲のようですし、例えば栄フィルの同じメンバーで演奏しても、指揮者が変わるだけで、まったく違う音楽になります。これはオーケストラの魅力であり、面白味だと思います。

今回、鎌倉芸術館に、お客様にお越し頂いての「ベートーヴェン交響曲第1番」は、お客様と織りなすハーモニーとなり、いつもとはまた一味違った、素敵な音楽になる事だと思います。

私はとても楽しみにしております。お客様にも、是非一緒に楽しんでいただけたらと思います。



© dak

## シューベルト

### 交響曲第8番「グレート」

トロンボーン/新居欣久

ねえねえ、「グレート」ってどんな曲？

一言でいえば長い。演奏速度にもよるけど55分くらいかな。

今年の春にやった交響曲第6番と同じハ長調で、2曲のうち、長大な方から「グレート」っていうんだ。

そんなに長いと聴くのは辛そう。

いやいや、大丈夫だよ。ブルックナーの様に寝て起きてもまだ同じフレーズだったり、マーラーの様に展開が多過ぎていつ終わるのかわからなかったりするようなことはないから、気楽に聴けるはずだよ。

ふーん。YouTubeで探したら交響曲第8番と第9番の両方があるね。

シューベルトには未完の交響曲が2つあって、それらも数えて第9番とされていたのだけど、40年くらい前から「未成交響曲」を7番目と数えて、「グレート」を第8番と呼ぶようになったんだって。割と最近の話だね。今回、栄フィルで使っている楽譜も第9番になっているんだ。

「未完成」なら知っている。良く演奏されているよね。でも、「グレート」はそうでもないんじゃないかな。

長い曲ゆえにメンバーの出番を考えると色々難しい面もあるんだ。ホルンが2パートしか無いとか、チューバが無いとかね。

しがらみとか、大人の事情があるんだね。



それで、演奏してみてどう？

それは楽しいよ。メロディーが美しいのはもちろんだし、なんていうか素直でトリッキーではないのが心地良いんだ。

トリッキーって？

聴いている限りでは気付かなくても、楽器毎に見ると小節の途中での受け渡しになっている複雑な曲も多い。ブラームスとかね。出損ねないように気を張っていないと危ないんだ。シューベルトの曲はそんなことはないからね。

ふーん。ずいぶんお気に入りのようだね。

練習で指揮者と目が合う回数が多いし、それも、「もっと大きく吹いて」というばかりではないのが、いいんだよ。もうね、あと1年くらいこの曲を続けてくれてもいいなあ。…って知り合いが言ってた。

あ、トロンボーン吹きの人ね。じゃあ、この曲はトロンボーンに注目だね。

だめだめ。トロンボーンは音が大きい割に目立ちたがりではないの。3人で和音が合えばにんまりしているような人達だから、そっとしておいてあげて。

でも、この話は曲目紹介に載るよ。

アキサミヨー！



# 賛助会担当より

ヴィオラ/谷口聡美

最近、賛助会に入会して下さった会員さまから、こんな温かいメッセージをいただきました。

「地元、この様な立派な楽団があり、見事な演奏が聴ける事が出来るのを、この歳になるまで知らなかったことを恥ずかしく思っています。つぎからの演奏を楽しみにしています。」

温かいお言葉に、団員一同、心から励まされました。

地元のみなさんを始めとする音楽ファンの方々に、「楽しい!」「また聴きたい!」と感じていただけるアマチュア・オーケストラを目指し、これからも精進してまいります。

賛助会のみなさま、いつも弊団を支えて下さり本当にありがとうございます。



## 《2023 シーズン 栄フィルコンサート予定》

3月19日(日) 第67回定期演奏会 鎌倉芸術館 (大ホール)

ブルックナー 交響曲第4番「ロマンテック」  
ワーグナー ジークフリード牧歌

指揮 稲垣雅之



7月23日(日) 夏休みファミリーコンサート 栄公会堂ホール

未就学児OKの栄フィルの夏コンを計画中です。

指揮 内山厚志



11月19日(日) 第68回定期演奏会 栄公会堂ホール

曲目未定 指揮者未定

### 賛助会報「アルペジオ♪」2022 秋 (第16号)

発行日: 2022年10月1日  
発行所: 栄フィル賛助会広報部  
編集: 谷口聡美 寒河江通子



#### 「アルペジオ♪」の由来

“アルペジオ”とは、和音の構成音を一音ずつ弾いていくことでリズム感や深みを演出する演奏方法のことです。  
栄フィルの団員と賛助会員一人一人を単音に見立て、単音それぞれの響きが重なりあって素敵な和音(栄フィル)となることを意味しています。